

～成人施設への移行～ Hさんの歩み

西駒郷 駒ヶ根支援事業部
駒ヶ根日中支援課 支援員 小林建太
支援員 江田 翠
支援員 向山洋子
ひまわり支援課 支援員 飯森悠太

1 はじめに

私たちの生活している社会は様々な部分で構造化され分りやすくなっている。私たちでさえ分らないことや知らないことが起こると不安になる。果たして、利用者にとって今の生活はわかりやすく、生きやすい場になっているのだろうか。

駒ヶ根日中支援課すてっぷは、自閉的傾向・行動障がい・知的障がいを併せて持った方が活動をしている。マンツーマン対応が中心となる日々の支援では必要に応じて環境の構造化を行い支援している。メンバーの多くは30代以上で10年以上入所し、集団の中で生活・活動をすることに慣れている。そんな中、Hさんは昨年西駒郷に入所された。年齢的にも若く（利用開始時23歳）、集団の中での生活経験はあるものの、個別対応を受けてきた方で日中活動には参加できていなかった。今回の入所にあたり、日中活動への参加を目標にし、ひまわり支援課とともに支援を行ってきた。その1年の実践をここにまとめ、振り返ることとした。

2 プロフィール

- (1) 氏 名 Hさん (23歳)
- (2) 性 別 男性
- (3) 生年月日 平成○年○月○日
- (4) 入 所 平成29年7月26日
- (5) 診 断 てんかん発作疑い、ADHDの疑い、広汎性発達障害

3 基本的な課題行動

(1) 奇声・興奮について

何かほしいものがもらえない時やしたいことができない時に、大声を出したり、飛び跳ねたり、泣いたり、扉を蹴ったり、強引に開閉するなどの行動がある。

(2) 他害について

不安時、不穏時に他者への噛みつき、引っかき、爪を立てる行動がある。

(3) 物損について

他害同様に不安時、不穏時に近くにある物などを投げたり、落としたりする行動が見られる。

また、それ以外にも機械などに執着心があり本人は壊すつもりはないが結果壊してしまう、壊れてしまうことがある。

(4) 自傷について

不安時、不穏時に耳を叩くことや爪をはがしなどが見られる。また、鼻の穴や耳の穴などに異物を詰め込むことがある。さらにエスカレートすると異物を飲み込むこともある。

(5) 飲水について

基本的に水への興味は強くあり、水道やプールなどの水辺を見つけると水遊びをしたり飲水をすることがある。飲水も唇の色が変わってしまうほど飲むことがあり、支援員が心配になって制止をするが、それが返って逆効果になりエスカレートしてしまうことがある。

4 好きな事・物、得意な事

(1) 好きな事・物

教育番組の音楽を聴いたり、雑誌やカタログ、新聞紙、広告などを破くことが好き。また、音の出る玩具などを好んでいる。

(2) 得意な事

養護学校時代、信濃学園でも取り組んでいた「ペットボトルのラベルはがし」を得意としている。その他にも様々なことができていたようであるが、入所してからはペットボトルのラベルはがしに取り組んでいる。

5 コミュニケーション

(1) 言葉の理解について

簡単な言葉（良い、悪い、おいで、行くよ）は理解できている。

(2) 表現能力

自分からの要求や訴えは、発生や指さしや職員の手を引きその場所まで連れていくなどのクレーン動作で表現する。そのため支援員側で本人の思いを汲み取る必要がある。理解してもらえないと不安や不穏につながり他害や物損などに発展することがある。

6 入所前の経過

平成13年よりの信濃学園に入所し、15年程集団の中で生活をしてきた。学校は、松本養護学校に通学。高等部の3年間では作業を中心に行い、「ペットボトルのラベルはがし」「ラミネートはがし」「牛乳パック切り」「切った牛乳パックをミキサーにかける」「裂き織り用の布を裂く」「紙やぶき」などに取り組んでいた。養護学校でも、他害や物損が頻回にあり、課題行動がないように落ち着いて過ごすことを主とした教育目標であった。

18歳になり養護学校を卒業となったが、地域移行が難しく、その後も信濃学園での生活が続いた。信濃学園では、午前中に棟を移動し作業活動を行い、それ以外の時間は居室がある棟で音楽を聴いたり紙やぶきなど好きなこととして過ごしてきた。その際も支援員がマンツーマン対応であった。

7 入所後の経過

今回の移行前に2回の実習もを行っていたため、スムーズな移行ができたのではない。入所して初日と2日目は、体験実習の思いがあったのかそこまで不調になることはなかった。日が経つにつれ迎えが来ない、帰れないということを理解し始めると不安定になり3日目にはひまわり支援課で他害発生した。その後も不安定な状態で毎日のように不穏時薬を服用する日々が続いた。

8 支援の経過

(1) 活動グループ

駒ヶ根日中支援課すてっぷ：利用者 5 名（H さん含む）/支援員 3 名

(2) すてっぷでの主な日課

時間	月	火	水	木	金
9:00～	日中活動				
10:00					
11:00	おやつ、水分補給				
12:00～	ひまわり支援課にて昼食				
13:00	日中活動				
14:00					
15:00	おやつ、水分補給。				
16:00	ひまわり支援課に戻る。				

(3) 支援目標

長期目標：新しい環境で、落ち着いて生活をする。

短期目標：新しい生活環境に慣れる。（入所、日中共通）

作業の量を増やす。

CD 以外にも楽しみを見つける。

上記を目標として立てたが、今振り返ると入所当初の目標としてはハードルが高かったと感じている。そこで、まず初めに「すてっぷに来てもらう」、「日中活動に参加する」という部分を目指して支援を開始した。

(4) 支援方法

ア 個室の用意

すてっぷは元々個別支援を中心とした部屋になっており利用者一人一人に個室が用意されている。H さんの特性から外部より受ける刺激が少ない環境が望ましいと考え個室を用意した。

イ 作業

信濃学園時代にも取り組んでいた「ペットボトルのラベルはがし」をすてっぷでも取り入れ、継続して取り組むこととした。

ウ 余暇時間

余暇時間では、好きなことをして過ごしてもらおうと H さん専用の CD デッキを用意し、作業が終わったところで提供をした。

音楽を聴く際は、ヘッドホンをして聴くようにした。

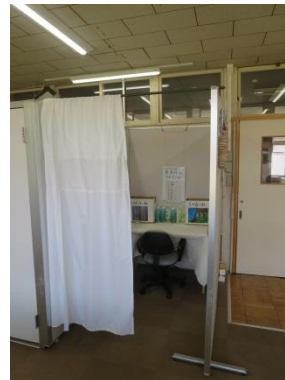
また、CD は信濃学園からいただいたもの使用。

CD デッキは、音量調整部分をボンドで固め調整ができないようにした。

エ 活動の切り換え

主に絵カードと声かけを合わせて行い、活動の切り換えを促した。

最初は新しい環境に慣れていただくことを念頭に置き支援させていただいた。



(5) 入所当時から現在までを4つのステージにわけて以下の表にまとめる。

ア 第1ステージ(平成29年7月26日～)

月日	Hさんの行動	理解の方法	支援の方法	結果
入所後	比較的日中活動への参加は順調であった。	今回も実習なのではないか。そのうちにまた信濃学園にもどれるのではないか。	信濃学園から頂いた情報をもとにこちらで検討した支援を進める。	Hさんも支援員も互いに探り探りの状態であった。
最初は信濃学園の支援をもとに行った。支援員もHさんもお互いに探り探りで行う中で徐々に新しい環境に慣れてきてくれたのではないかと印象を受けた。入所当時にあった車を探す行為を少なくなってきた。				
8月中旬～下旬	日中活動に参加するもすぐにひまわりへ戻ってしまう。	日中活動はあまり好きでない。居室で過ごしたい。	適切な支援方法が見つからず、本人の意思のまま過ごしていただいた。	ひまわりに戻るというパターンが生まれてしまい、すてっぷでの活動はほとんど行えていなかった。
入所当時からのCDに対して飽きがきていたのではないかと考察し、新しいCDを提供することにした。				
9月上旬	活動に参加できるようになった。	新しいCDは聞いてみたい。	教育番組などの音楽が収録されたCDを提供した。	CDが新しくなったことで、再びCDに興味を沸き集中して聴くようになった。同時に活動にも参加できるようになった。
9月下旬	活動中、本人からの要求に対して支援員が対応できず、興奮状態になり使用していたCDデッキを破損させてしまう。	要求にこたえてほしい。	本人からの要求は他利用者にも影響があったため、要求に応えられなかった。	結果として興奮状態にさせてしまいCDデッキ破損という結果に
他利用者との活動経験が少ないHさんにとってすてっぷは刺激が多い環境であると感じた。 CDデッキ破損に伴い、急遽新しいCDデッキを用意し提供した。その際音量調整部分をボンドで固めて調整ができない状態にした。				
	集中して音楽を聴く。	新しいCDデッキは興味がある。操作したい。	破損前に使用したデッキと同じような機種を探し提供した	CD同様に新しくなったデッキに興味をもち、活動参加が安定してきた。

(ア) 評価

新しい環境に慣れてきており日中活動への参加も安定してきた。また支援員にとってもHさんのことを知る良い期間だったと感じられる。Hさんとの関係も築けてきた

からか支援員の声掛けによる日中活動参加の切り替えも行われるようになった。しかし、環境や支援員に慣れてきたこその要求も増え、それに伴い高揚状態になることも増えてきた。

(イ) 今後の課題

- ・ 本人の要求の理解
- ・ 他利用者との活動の兼ね合いについて

イ 第2ステージ（平成19年11月8日～）

(ア) 日課変更について

ひまわり支援課にて昼入浴が実施されることになり、そのため月・水・金曜日の午後は昼入浴の時間となった。入浴後は日中活動へは参加せず、ひまわり支援課で過ごすこととなった。

時間	月	火	水	木	金
10:00～	すてっぷの受け入れ態勢が整い次第、日中活動参加。 作業後（ペットボトルラベルはがし）→余暇活動（雑誌やぶき、音楽、おやつ）				
11:00					
12:00～	ひまわり支援課にて昼食。				
13:00	ひまわり 昼入浴	午前同様の 活動内容	ひまわり 昼入浴	午前同様の 活動内容	ひまわり 昼入浴
14:00					
15:00					
16:00					

(イ) 上記の新日課が始まってからの本人の様子と試みた支援とその結果

月日	Hさんの行動	理解方法	支援方法	結果
11月 月上旬	最初の1週間は新しい日課に混乱し不安定状態が続いた。 鼻に物を詰める行為が多くあった。	日課が変わったことを教えてほしい。	日課の変更について本人への説明はしなかった。また、日課表などの提示もしなかった。	新しい日課に混乱し不安定になることがあり、鼻に異物を詰める行為や不穏時薬の回数も増えてしまった。
本人への説明不足から不安定な状態が続き、自傷行為や不穏持薬の回数が増えてしまった。そこで本人に日課や予定を伝えるために視覚支援開始した。本人の理解力は不明だったか最初は実際に写真カードから支援を始めた。すてっぷ個室にホワイトボードを設置し、活動の写真カードを貼り付け活動の流れを示した。				
12月 月上旬	写真カードに対して反応は鈍かったが、活動は行った。	これはなんだろう。	すてっぷに入室し自席についたところで活動の写真を使い活動の確認を行う。 活動が終わるごとにカードを外し支援員に渡す。	写真カードに対する理解については確認することができなかった。 期間を設け辛抱強く取り組み、評価をしたいと思います。
しばらく写真カードの支援を続けたがカード自体を認識し、活動を行っているというよりも毎日の活動の中で作業の流れを覚え、活動しているように感じた。写真カードの理解は難しいといっているだろう。しかし、この視覚的支援から色の識別ができるかもしれないというアセスメントを取ることが出来た。				

月日	Hさんの行動	理解方法	支援方法	結果
1月 中旬	ペットボトルの作業を行なくなり、活動に参加して真っ先にCDの音楽を聴き始める。 この頃、毎日ように不安定状態が続く、不穏時薬の服用も多かった。	作業はしたくない。音楽が聴きたい。	作業を無理強いせず、本人の行動も見守った。	作業は一切行わなくなってしまった。
2月 中旬	他利用者の雑誌を破き、居室へ持ち帰る。 すてっぷにある広告を見つけ、居室に持ち帰る。	雑誌を見ると破きたくなる。 居室に持ち帰ってゆっくり楽しみたい。 雑誌・広告はずき。	注意はするが、無理にとめたりはせず行動を観察 特に制止はせず本人の行動を見守る。	好きな雑誌やぶき、広告やぶきができたことで落ち着いて過ごせた。 好きな雑誌やぶき、広告やぶきができたことで落ち着いて過ごせた。
作業は行わない者のCD以外の楽しみとなり活動に落ち着いて参加できるようになった。今まではひまわり支援課の楽しみとして雑誌・広告を提供していましたが、日中支援課でも提供することにした。また、提供を始めた雑誌・広告提供を利用し「ペットボトルラベルはがし」の作業活動ができないか試みた。 紙やぶき→ペットボトル作業→CDデッキの提供屋→音楽→おやつの順番で試行した。				
3月 中旬	初めは、躊躇していたが雑誌・広告が貰えるということがわかるとスムーズに作業を行うようになった。	雑誌・広告が貰えるなら作業を頑張る。	無理強いせず、本人のペースを見て作業へ誘導を行う。	活動パターンが確立され、安定して活動に参加できるようになった。
4月は支援員の変更がなかったためか安定して活動に参加できていたが、要求の強さは変わらず見られた。またこの頃から徐々に他利用者のおやつや雑誌・広告がほしくなってしまう手を出すことが増えてきた。 5月の連休明けからはGW中の日中活動がなかったストレスからか興奮状態になったときに同室の他利用者に噛みつく事故が多発した。 6月にも同様な事故が続くその結果、すてっぷ内での他利用者の活動が難しくなってしまった。				

(ウ) 評価

興奮状態が多くあったが、それと同時に新たなアセスメントをとれた期間でもあった。また活動パターンも確立され、完全なマンツーマン対応ではなくても過ごせる時間が増えてきた。しかし、それと同時に他利用者の物を取ってしまったりと他利用者とのトラブルが多くあった。また要求が通らない際の噛みつき事故也多発してしまい、他利用者との同じ部屋での活動は難しいと感じた。

(エ) 今後の課題

- ・ 集団の中での活動の定着
- ・ 他利用者とのトラブル
- ・ 噛みつき事故の多発

ウ 第3ステージ（平成30年6月12日～）

（ア）日課変更について

5～6月頃から事故が連続して発生したためひまわり支援課支援員とケア会議を行い、ケース検討をした。その結果、日中活動参加の時間を短縮することとした。活動は午前のみとなり、午後はひまわり支援課居室にて過ごすこととなった。

時間	月	火	水	木	金
10:00～	すてっぷの受け入れ態勢が整い次第、日中活動参加。				
11:00	作業後（ペットボトルラベルはがし）→余暇活動（雑誌やぶき、音楽、おやつ）				
12:00～	ひまわり支援課にて昼食。				
13:00	基本的に午後はひまわり支援課個室にて過ごす。 月・水・金は昼入浴を実施。				
14:00					
15:00					
16:00					

（イ）評価

時間が短縮された結果今まで行ってきた活動に集中できることが出来、落ち着いて過ごせていた。しかし他利用者との関係を築くことが難しくHさんの影響ですてっぷの利用者がすてっぷを離れて活動をする事態が起きていたため、この状況を打開する必要があると考えた。

（ウ）今後の課題

- ・ Hさんが落ち着いて活動できる環境の構成
- ・ 他利用者が安心して活動できる環境の構成

エ 第4ステージ（平成30年7月9日～）

（ア）変更内容

7月9日より日中支援課の支援室再編成が行われ、それに合わせてHさん専用の活動部屋を用意した。理由としてはいままでの支援の結果、他利用者と一緒に活動することはまだ難しいと考えた。まずはHさんが落ち着いて過ごすことができるように刺激をなくした部屋でのマンツーマンでの活動から始めることとした。

月日	Hさんの行動	理解の方法	支援の方法	結果
7月	初日は、新しい部屋に対して戸惑いが見られ、以前いた部屋に入った。その後も新しい部屋を受け入れられるまでの不安定な状態が続いた。	すてっぷもよかったけど、新しいお部屋も良い。	Hさんの専用の個室を用意。 棚を設置し、以前のお部屋で行っていた流れを再現した。 また、パーテーションを使用し作業スペースと余暇スペースを分け、切り換えを行った。	初めは戸惑う様子もあり、不安定になることもあったが、使用していく中で自分の居場所を確立させ、段々と落ち着いてすごせるようになってきた。
前回の支援の中で得た色の識別の理解をヒントに個別部屋の再構造化を行った。 これまでは、パーテーション1枚で作業スペースと余暇スペースを分けていたが、新たに余暇スペースに小上がりの畳スペースを設置し、視覚的にも切り換えが理解できるようにした。				

8月 下旬	Hさんの方で新しくなった部屋の状況を理解し作業スペースと余暇スペースを上手に分けて使い始めた。		個室をさらに構造化し、視覚的に活動の切り換えできるように作業スペースと余暇スペースを分けた。余暇スペースは小上がりの畳スペースを設置。	
9月下旬にスーパーバイザーの方が来所され、Hさんの活動の様子を見ていただいた。個別部屋や活動の流れやなどについて良いのではないかとお言葉をいただいたが、対応が一人にのし支援員に固執するのはあまり良くないとアドバイスを受けました。これを受けて活動に参加する際と帰寮する際にシンボルを持って移動する。そして移動した場所にシンボルを枠にはめ込むという方法を検討した。また、活動の中でも作業や余暇時間に移る際にシンボルを枠にはめ込み次の活動に移る流れを検討し実施した。				
10月 ～ 11月	特に拒否もなくこちらが考えていたよりもスムーズにシンボルを受け入れて行ってくれた。		居室も出るときに必ず渡すようにし、活動部屋まで誘導する。 活動が始まってからも支援員が付き添いシンボルの枠はめを行う。 帰寮時は、ひまわり支援課入り口で引き継ぐため、居室に戻る際はひまわり支援員に協力いただく。	Hさんの様子からシンボルに対しての理解・定着はあまり見られていない。今後対応する支援員を変えて、シンボルを試し効果があるか見ていきたい。

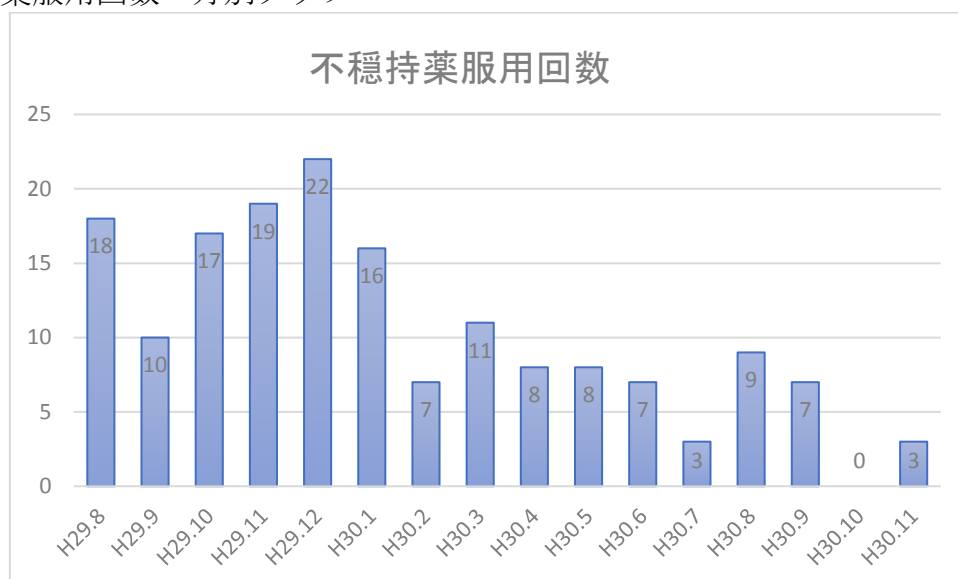
(イ) 評価

個別部屋を設置したことで環境的な刺激が少なくなり、安定した活動が行えるようになった。作業の切り替え・日中支援課、ひまわり支援課の切り替えをスムーズに行えており、Hさんにとって現在の環境がとても安心した環境になっていると感じられる。しかし、人と関わるのが好きなHさんにとって1人の活動部屋はさみしいのではないかと推察される。また関わる支援員が固定しているため、誰とでも安定した活動が行えることを目指していきたい。

(ウ) 今後の課題

- ・ 他利用者との交流
- ・ 支援員がかかわっても落ち着いて過ごせる支援の確立

9 不穏時薬服用回数 月別グラフ



上記のグラフは、Hさんの入所当時からの不穏時薬の服用回数を月別に表したものである。ご覧のように、入所か半年ほどは服用の回数も多いが、H30.2月頃から服用回数が減ってきていることがわかる。この頃からHさんの好きな雑誌・広告を活動の中に取り入れ、さらに活動の流れもパターン化してきたこともあり、Hさんも安定した活動が行えるようになり服用の回数が減ってきたと考える。

また、H30.7月から集団部屋より個別部屋に移行となり、さらに服用回数が減少したことが読み取れる。個別部屋になったことで外的刺激も減り、さらに活動の流れもパターン化されてきたことからより精神面の安定に繋がり日々落ち着いて活動ができていると考える。

10 おわりに

Hさんの成人施設（西駒郷）移行から1年と数カ月が経過した。

Hさんご自身もそうあるが、私たち支援員も共に成長できた1年であった。

今では笑顔も多く見られ、穏やかな生活が送れていると感じている。

しかし、これがゴールではない。

今後もHさんに寄り添いHさんがより豊かな生活・人生が送れるようにサポートをしていきたい。

この実践をとおして、構造化の重要性について学ぶことができた。

Hさんのように言葉での意思表示が難しい利用者にとって構造化されていない環境は不安だらけであったと思う。

そこでHさんを含む利用者の不安をいち早く察する為にも日々のアセスメントが必要であり、重要であると感じた。

毎日の中で提供する支援も大切なことであるが、それよりも利用者のことを深く理解し、その利用者が何を考え、何を訴えているのかを支援者側がしっかりと汲み取りそれに応じた環境や支援を提供していきたいと思う。